

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 なかむら 中村 ともえ

本論は小説の「筋」をめぐる谷崎潤一郎の特異な捉え方に着目し、あわせてジャンルとしての近代小説の表現形式の可能性について論じたものである。

構成は四部から成る。まず序章と第一部においては、『刺青』から『蓼喰ふ虫』までの創作において、作中の絵画や演劇が「筋」の展開にどのようにかかわるかが論じられている。作中画を模倣するように作品世界が形成され、あるいは作中人物が自ら芝居を意識することによって事件が展開していく様相を論じたくだりは、谷崎の創作方法に関するあらたな問題提起として注目に値する。また、『お艶殺し』の大正期の上演記録の詳細な検討を通して、脚本化にあたって旧劇（歌舞伎）、新劇それぞれの枠に収まらぬファクターが表出され、それが結果的に近代演劇の抱えていた歴史的課題を浮き彫りにするものであることが指摘されている。ジャンルとしての「小説」と「劇」との接点を論じる上で、きわめて有効な視点であると考えられる。

第二部においては、昭和期の谷崎のいわゆる「古典回帰」といわれる諸作品が分析されている。たとえば『吉野葛』においては、一人称の紀行文形式がとられることによって作中人物の物語がフィクションとして相対的に自立していく様相が明らかにされ、また『春琴抄』においては、作中人物が自らの幻想を語り始める契機が作品構造上の問題として明らかにされている。これらはいずれも物語が自立していく過程それ自体を表現していく、谷崎独自の方法を指摘したものとして注目される。

第三部においては、谷崎の外国文学の翻訳の検討を通して、人物の発話や心内語の扱い方の特色が論じられ、さらに源氏物語の現代語訳の検討を通して、いわゆる「旧訳」と称される戦前期の「谷崎源氏」を再評価する視点から、原文とも他の現代語訳とも違う、独自の世界が構築されていく様相が明らかにされている。

第四部では、谷崎の戦後の作品が取り上げられている。『細雪』においては視点人物の予感がことごとく外れていく構造を通して、また、『夢の浮橋』においては「素人の文章」ゆえに露わとなる語りの破綻を通して、いずれも統合的、一義的な語りでは表現不可能な世界が表出されていく様相が導き出されている。

このように本論においては、谷崎潤一郎の作品の機構上の特色がさまざまな角度から明らかにされている。時に結論を急ぐあまり、論理の展開が性急になる傾きもあるが、「近代小説」というジャンルに内在するさまざまな可能性に問題を敷衍しえたその成果は高い評価に値する。

以上の点から本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するとの結論に達した。